

紅晶母

2008年11月号

発行：テラ・ルネッサンス

発行日：2008年11月20日



▲完成した穂高小学校の子どもたちと㈱穂高住販代表取締役の川向様



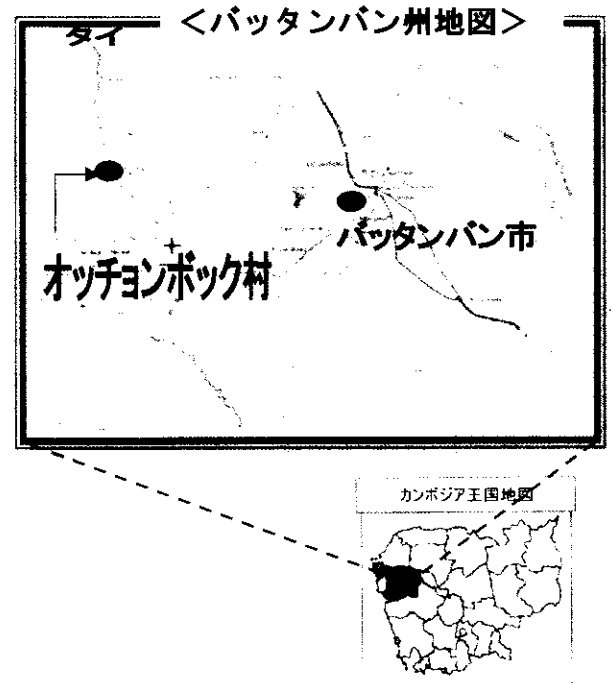
▲カンボジア・スタディ・ツアーで熱心にメモを取る参加者

Contents

- p.2 カンボジア・ラオス事業報告
- p.4 知識の実
- p.5 ウガンダ事業報告
- p.6 あくていびてい・れぽーと
- p.7 ふえいす to ふえいす
- p.8 てらるね手帳

～地雷原の残る村での村落開発支援スタート～

カンボジア北西部のタイ国境は、世界でも有数の地雷埋設地域であり、今でも多くの被害者を出しています。今回支援をスタートした村は、バットバン州コムリエン郡のオッチョンボック村。この村には、197 家族（963 人、そのうち女性 457 人）が生活しており、そのうち土地も無い「最も貧しい生活」を強いられている人々が 27 家族、一般的に「貧しい」とされている人々は 151 家族にもなります。また地雷による障害者は 9 人、高齢者 16 人が生活しており、政府からの社会保障は何も受けていません。また約 100 人の子どもが学校へ通うことができないでいます。この村でもまだ家のすぐ先には地雷が埋まっている場所が残されており、本会が提携する地雷撤去団体 MAG への資金提供を継続するとともに、この村での貧困層を対象とした開発支援を 2008 年 10 月より始め、『新たな地雷事故ゼロ、被害者ゼロ』の達成を目指します。



～国境問題で静まり返った街で始まったプロジェクト～

村では、2008 年 4 月に村人がミーティングを開き、100 家族の村人が住民組織（寄り合い制度）に登録されました。住民組織では、収入向上（マイクロクレジット＝小規模融資）、社会保障（健康保険など）、奨学制度などのシステムを作り、運営していきます。国境が目と鼻の先のこの地域では、10 月に入り、タイとの国境問題で大規模な戦争が起こるかもしれないと、住民の多くが不安な毎日を送るようになりました。安全な場所に住む親戚の家に避難をしている人もいて、訪れる人も少なく、街は静まり返っています。それとは対照的にこの村では、これまでもみんなで少しずつお金を出し合い、村の道を整備してきた経験もあり、今回のプロジェクトでも積極的に議論がなされてきました。それでも足りない資金面の補助を本会からすることになります。マイクロクレジットの元金は、JICA 基金（＝「世界の人びとのための JICA 基金」）から賄われ、また、地雷被害者への社会保障、貧しい人々が病気や怪我などによって生活がさらに悪化するのを防ぐための健康保険制度なども、村人たちが毎月小額（1000 リエル＝約 25 円）を住民組織に貯蓄し、まかないます。さらに家庭の経済的な理由で教育を受けられない子どもたちには、住民組織が奨学制度を設立し、制服、文房具を買うのに必要な資金を村人から集めていますが、足りない場合は、NGO 地雷ゼロ宮崎様（<http://www.spin.ne.jp/mlc-zero/>）からのご支援で、不足分を本会よりサポートしています。（えずみ）



～地雷事故で足を失い・・・そしてまた地雷原の村へ～

リン・リンさん（38 歳）、4 人家族、3 人の子どものお母さんです。1994 年、川辺に沿って歩いていた時に、昨年会が村落開発支援を行ったバナン郡チャンミエンチャイ・コミュニティで事故にあいました。その当時はバナン地域に住んでいましたが、地雷が多く残っていました。彼女は毎日その道を歩いていたため、そこに地雷が埋まっているとは思いませんでした。事故の後、足の治療のためにバットバン州立病院に行き、右足を切断。義足をはめての農作業は非常に大変で、生活状態は厳しいですが、住民組織のメンバーとなった彼女もまた一員として制度を運営、自らの生活の改善にも取り組みます。（えずみ）

～待望の小学校完成！～

カンボジアのバットアンバン州バヴェル郡サムレン・チャイ村。周りを見渡しても木と田んぼしか見えない道を進んでいくと、真っ赤な屋根が見えてきます。突然現れた、それまでとは全く違う風景。そこには、株式会社穂高住販様からのご寄付により、1月から建設を始めた「穂高小学校」があります。

この村の一番近くの学校は、7kmも離れていました。小さな子どもたちは通うことができません。雨季になり雨がたくさん降れば道が悪くなるという悪条件が重なり、さらに通うのが困難になります。この小学校のおかげで、近くの3つの村から、2008年10月現在、約90人の子どもたちが学校に行けるようになりました。

9月22日は待ちに待った開校式。朝にも天気は晴れ。この日は川向様（株式会社穂高住販 代表取締役）にもご出席いただきました。今年は雨が少なかったカンボジアでしたが、やはり道はいいとは言えませんでした。

30分以上歩いて、2つの橋を渡り、ようやく穂高小学校に着いたときには、100人以上の村人が出迎えてくれました。式には100人以上の村人、200人以上の小学生、村長、バヴェル郡教育省の方も出席され、大変にぎやかな1日となりました。村長、教育省の方と順番にスピーチをしていただき、テラ・ルネッサンスを代表してカンボジアに駐在中の江角もクメール語でスピーチ！もちろん川向様にもご挨拶いただき、京都文紙事務用品組合様よりご寄付いただいた文房具類の贈呈式も終え、開校式は終了しました。終始子どもたちは笑顔。学校に通っているこれからの自分を想像して嬉しかったことでしょう！

嬉しいのは子どもたちばかりではありません。小学校の建設作業員として多くの村人が働き、収入を得ることができました。公共事業で雇用を増やす、いつの時代もどこの国でも通用するのです。しかし、学校建設が終われば彼らの仕事も終わってしまいます。8人の子どもがいるあるお母さんも、例外ではありませんでした。小学校が完成した今、収入を得ることができず、タイ国境付近に移住するか生まれ故郷に帰るか、の選択を迫られています。自分が建てた学校に自分の子どもを通わせることができない。きっと無念な気持ちでいっぱいでしょう。そんな人たちのためにも、テラ・ルネッサンスは子どもたちが学校へ行けるように収入向上のための職業訓練をする予定です。まだまだ模索状態ですが、新プロジェクトの新着情報をお知らせできるよう、今後も頑張ってまいります。



▼ 授業の様子

▲ 体育の時間に行っている生徒

▼ 穂高小学校の全景



▲ 作業員のお母さんと子どもたち

子どもたちの笑顔を見ていると、カンボジアの将来にも希望が持てます。子どもたちにとっても親御さんや村人にとっても、そして私たちテラ・ルネッサンスにとっても、穂高小学校完成は大変嬉しいニュースとなりました。（あおき）



オスロ・プロセスとは、NGO と有志国とが協力しながら進めてきた、クラスター爆弾禁止への道のり（一プロセス）のことです。ノルウェー政府の呼びかけではじまったこのプロセスは、ノルウェーの首都であるオスロ（ちなみにノーベル平和賞の授賞式はここで行われます。）から名前をとって、オスロ・プロセスと呼ばれています。それまでは、CCW（特定通常兵器使用禁止条約）の会議でクラスター爆弾の問題について話し合われていたのですが、この会議では全会一致ではないと物事が決まりません。そのため、クラスター爆弾禁止に反対する国（例えばアメリカやロシア）との意見があわず、クラスター爆弾禁止実現への可能性がほとんど見えませんでした。そこで、業を煮やしたノルウェーの呼びかけではじまったのがこのオスロ・プロセスです。

（対人地雷禁止へのプロセスもこのようにNGO と有志国との協働で進んでいったのですが、対人地雷禁止へのプロセスはカナダが中心となったため、カナダの首都の名前をとってオタワ・プロセスと呼ばれています。オスロとオタワ、ちょっとややこしいですね。）

2007年2月にオスロで開かれたNGO と有志国による会議から、オスロ・プロセスは本格的にスタートしました。このオスロでの会議にはNGO と49ヶ国の政府とが参加し、「オスロ宣言」と呼ばれるクラスター爆弾禁止を目標とする宣言が採択されました。参加国49ヶ国中の46ヶ国の賛成で採択されたこの宣言なのですが、残念ながら日本政府はこの宣言に賛同しなかった3ヶ国のうちの1つでした。

その後2007年5月にペルーのリマで、そして2007年12月にオーストリアのウィーンで、続いて2008年2月にニュージーランドのウェリントンでそれぞれ会合が持たれました。会合を重ねるにつれ参加国が増えていったのですが、日本政府はクラスター弾が安全保障面から重要だという立場から（島国である日本は、もし敵が海から攻めてきた際に、敵の上陸を防ぐためにクラスター爆弾が必要というのが日本政府の立場でした。）、クラスター爆弾禁止には消極的な姿勢でこれらの会合にのぞんでいました。

そして、2008年5月にクラスター爆弾禁止条約の実質的な内容を決める重要な会合がアイルランドのダブリン

で開かれたのですが、日本政府はそれまでの態度をあらため、この会議で採択されたクラスター爆弾禁止の条約案に賛同しました。これは、日本政府が事実上クラスター爆弾禁止に賛成したということです。日本政府が態度を変化させることになった背景には、NGO からの働きかけや世論の高まりがあったと言えるでしょう。

ただ、まだ安心はできません。クラスター爆弾禁止条約の調印式が今年の12月にノルウェーのオスロで開かれるのですが、日本政府の態度は、「条約案の採択には賛同したが、まだ署名すると決めたわけではない」というものです。クラスター爆弾禁止に賛成の立場を示した福田首相が首相の座を退いた今、日本政府が12月の調印式でクラスター爆弾禁止条約に調印するとは限らないのです。そのため、12月2日～3日にオスロで開かれる調印式に向けて、NGO、そして世論が政府に対して働きかけ続けていくことが大切になってきます。（ひぐち）

参考文献

- 日加田護子（2007）「クラスター爆弾禁止・「オスロ・プロセス」始動」、『世界2007年5月号』
- 清水俊弘（2008）『クラスター爆弾なんてもういらない。世界から兵器をなくすみんなの願い』、合同出版

2003年

- ・3月：イラク戦争でクラスター爆弾が使用され、クラスター爆弾への関心が高まる。
- ・3月：クラスター爆弾禁止に取り組むNGOの国際的なネットワークであるCMCが発足。
- ・3月：テラ・ルサもこのころからクラスター爆弾の問題に取り組む。

2006年

- ・7月：イタリヤとシバの紛争でクラスター爆弾が用いられ、クラスター爆弾の問題に再度関心が高まる。
- ・11月：CCWの会議が進展なく閉会。

2007年

- ・2月：オスロ会議（49ヶ国参加、うち46ヶ国がオスロ宣言採択）→オスロ・プロセスの本格的な始動
- ・5月：リマ会議（37ヶ国参加）
- ・11月：ウィーン会議（138ヶ国参加）

2008年

- ・2月：ウェリントン会議（103ヶ国参加）
- ・5月：ダブリン会議（111ヶ国参加、うち107ヶ国がクラスター爆弾禁止条約案採択）
- ・12月：オスロで条約調印式（予定）

2008年1月に4期生15名(10代後半の元子ども兵)を受け入れ、当会の社会復帰センターは今までにない活気があふれています。2005年から本格的に始まったウガンダ事業ですが、当初の受け入れは自立が一番困難だとされていた①子どもがいる元少女兵(チャイルドマザー)、②片足を失うなど障がいを負ってしまった元子ども兵、にしばられていました。しかし、昨年から受け入れ枠を広げ、外務省無償資金協力によって建てられた施設の中に、木工大工の教室も作られたことにより、多くの男の子が入学してきました。それにより、今まで女の子が大半だった当会の施設でしたが(表1参照)、休み時間にふざけあったり、サッカーをしたりと、さながら日本の高校のような雰囲気が漂い、生徒たちは仲良く楽しそうに勉強に励んでいます。そんな彼らの元気・やる気、そして希望を育む場所として今後も活動をしていきたいと思ひます。

表1 期生別受益者(生徒)数

期生	男	女	計
1	2	14	16
2	1	22	23
3	2	35	37
4	14	1	15
計	19	72	91

ダンスや歌を学ぶ日曜学校 ～もうひとつのテラ・ルネッサンス～



▲ダンスの様子



▲歌の様子

元子ども兵社会復帰支援センターの土曜日。20代の元子ども兵が学び、技術を習得する平日のセンターと一風変わり、たくさん子どもたちが車に乗ってやってきます。「センターが休みの土日をも有効利用するために子ども達のダンスや歌を練習する、いわゆる日曜学校をしてみようか」というスタッフの声からこの恒例行事は始まりました。

先生は平日、当会の生徒に音楽を教えているサンデーとアチョリ族伝統ダンスの先生ホールです。さすがはアフリカ人の血を引く子どもたち。歌もダンスもノリノリで、覚えも良く、激しく熱いあつという間の4時間を過ごしていました。

～ペーパービーズ～

社会復帰のための授業の一環で受益者(元子ども兵)が作っているのは、いらなくなった紙を再利用して作った『ペーパービーズアクセサリ』です。古雑誌を裁断機で切り(写真①)、一つ一つ丁寧に手で丸め(写真②)、ネックレスやストラップを作っています(写真③)。2008年から当会が出店するイベントでも販売を始め、ご購入された方々から「紙には見えないくらいクオリティが高い」「かわいい」などとたくさんのコメントをいただきました。古雑誌を切って作成しているため、一つとして同じ物はありません。彼女たちが一つ一つ丹念に作った『ペーパービーズアクセサリ』は、これからのイベントでも販売していきます。イベントの詳しい情報はホームページで随時、更新していきますのでご確認ください。(くりた)



▲①裁断機で紙を切る



▲②手で一つ一つ丸める



▲③イベントでの販売の様子

2008年9月1日から8日の日程で、2008年夏カンボジア・スタディ・ツアーを行ないました。私たちのツアーの目玉は、カンボジアの3都市を回ること、そして地雷原見学ができるということです。今回は全国から10名の社会人や学生の方が参加され、五感をフルに使って“感動”や“ショック”、“気づき”を得て、帰国しました。単に気づきといってもいろいろあります。例えばカンボジアのゴミ山は衛生上よくないし、なくさなければならぬ。けれどもゴミを拾って生計を立てている人は仕事を失うことになってしまう…など、問題解決が一筋縄ではいかないということです。気づきの観点は参加者によって違い、それが個性となります。今回はその個性が光ったツアーとなりました。そして気づきからどのように自分が変化するか、どう行動するのか、それが「平和の担い手」となる瞬間でもあったりするのです。

ツアー中私たちスタッフは引率者として参加者のケアやフォローをしりますが、帰国後も重要な仕事が残され

ています。その1つとして報告書作成や報告会のお手伝いがあります。毎回参加者はツアー中受けたものの大きさに、文章に起こすという作業に大変苦しみます。頭の中では分かっているけど文章にできない、そもそも整理ができない…。しかしこの作業を経ることによってまた大きく成長することを私たちは覚えています。こうして完成した報告書や報告会は大切なもの。2008年夏のツアー参加者も、今この作業に取り組んでいる真っ最中です。報告書は来年1月に完成予定ですので、ご希望の方はテラ・ルネッサンス事務局までお問い合わせくださいませ。（あおき）



ウォン・ウィンツァン チャリティピアノコンサート ～カンボジアからの風にのせて～

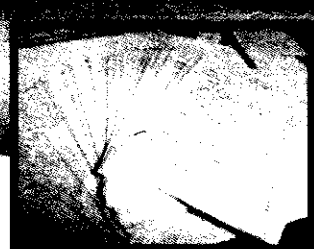
2008年9月26日金曜日、京都府立府民ホールアルティにて、チャリティピアノコンサートを開催いたしました。ピアニスト、ウォンさんとのジョイントイベントも、今回で3回目です。

午後6時半から7時45分までは、トークライブ。テラ・ルネッサンス職員でカンボジア駐在の江角が、カンボジアの現状を報告させていただきました。特に、地雷の種類や仕組みについて、かなり克明な説明がなされ、参加者の皆様からは勉強になったという感想をいただきました。

午後7時58分からは、ウォンさんのピアノコンサート。ピアノの第一音がホール内に響いた瞬間、空気ががらりと変わり、まるで深い森の中にいるような静かな雰囲気になりま

した。最後の“もしも地雷がなかったなら”では、ウォンさんのピアノの音色と奥様である美枝子さんの朗読とが、ホール内に沁みわたりました。会場が一体となり、地雷がない世界を願うことができたと思います。

今回のイベントは、参加者の皆様をはじめ、関わったスタッフ、インターン、ボランティアそれぞれが、平和のために祈り、そのための実際の一歩を踏み出す場になったと感じます。ご来聴いただいた皆様、ウォンさん、美枝子さん、本当にありがとうございました。（ほそだに）



今年の9月、結晶母発送時に「テラ・ルネッサンス会員アンケート」を実施させていただきました

このアンケートは、①会員の皆様と顔が見える関係をつくること、②会員の皆様の率直な意見を取り入れること、その意見から③テラ・ルネッサンスの新たな活動の起点とすること、この3点を目的として行いました。

発送後、多くの会員の皆様が回答をお寄せ下さいました。本当にありがとうございます。今回はその中から、会員の方がなぜ会員を継続しているのかという質問についての回答をいくつか紹介させていただきたいと思います。

少年兵という存在を知り、衝撃を受けました。

もし自分の子供が同じような境遇だったら…と思うと、何か少しでも私も、できることから、行動を起こし、より良い世界に向けて生きていきたいです。

(正会員・女性)

遠い国の出来事を実際に知ることにより、自分の今おかれている立場に感謝ができます。

そして少しでも協力して当たり前の人生が歩める人が増えていって好ましいと思います。

(個人会員・女性)

アンケートにお答えいただいた会員の皆様、貴重なご意見をありがとうございました。今後、皆様からのご意見を当会運営の参考にさせていただきます。

なお、アンケート回収はまだ受け付けております。まだ発送されていない方は、9月の結晶母に同封している封筒にて返送ください。お手数ですが、よろしくお願い致します。(かしわばら)

ふえいす to ふえいす。顔の見える NPO を目指すテラ・ルネとしては、会員の皆様にテラ・ルネの顔が見えていただけるように、事務局のメンバー紹介をしていきます。今回はスタッフの牧野由起子とインターンの柏原健太です。



牧野由起子

MAKINO, Yukiko

2008年1月よりスタッフとして経理・総務担当

大阪府・吹田市の出身で、現在も吹田から事務局に通っています。NGOのスタッフとしては情けないことに飛行機が苦手で、なるべくなら飛行機には乗りたくないため、海外出張には行きたくないと思ったりもしています。

国内外でのテラ・ルネの活動が円滑に進められるよう、国内事務局の体制整備が私の役割であると考えていますので、これからもさまざまなことに取り組んでいきたいと考えています。

私がテラ・ルネでインターンを始めたきっかけは“私たちは一人ひとりに「未来をつくる力」がある”というテラ・ルネの理念を知ったことでした。私は以前から世界の様々な問題に関心があり、どのようにしたらこうした問題を解決することが出来るのかと考えていました。考えていくうちに自分だけでは何もできないと強く感じ、自分の無力さを感じました。そんな時に会ったテラ・ルネの理念は、一人ひとりにもできることがあり、みんなの力をあわせることで、大きな力になるということを知ってくれたのです。

私は現在会員サービス担当として、新規会員様への文書発送、既存会員様へのアンケート実施などを行っています。その一つ一つを通して会員様とのかけ橋となるとともに、会員様一人ひとりの持つ力に気づいてもらえるきっかけとなることを願っています。



柏原健太

KASHIWABARA, Kenta

2008年4月よりインターンとして会員サービス担当

てらるね手帳



Child Soldier - What were you doing at 13 years old?

クリスマスも間近な 12 月 5 日(金)。テラ・ルネッサンスの本拠地“京都”の LAB.TRIBE で、“子ども兵”をテーマに、クラブイベントを開催することが決定しました。ゲストは 12 月 3 日にメジャーセカンドシングルを発売するバンド、FUNKIST! ウガンダ駐在代表の小川真吾も帰国して、トークライブに出演します。アフリカの“今”を生きる子どもたちから世界の“未来”を作り手の皆さんにむけられたメッセージを FUNKIST とテラ・ルネッサンスがお届けします。

2008 年 12 月 5 日(金曜日) 開場 16:00 / 閉場 21:00
前売り 2,500 円 / 当日 3,000 円 (ドリンク別 / 定員:200 名)

イベント内容(下記掲載内容以外にもブース出展等の企画有)

鬼丸昌也講演、染谷西郷×鬼丸昌也×小川真吾トークライブ
FUNKIST ライブ、Three Piece Of Communication ライブ

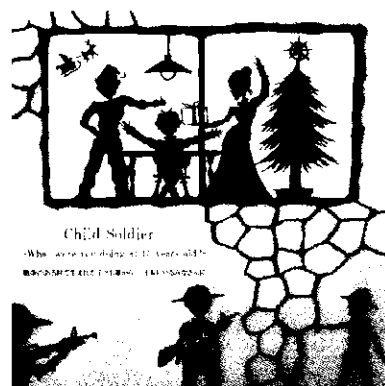
チケット購入方法等、下記アドレスに掲載しております

http://www.terra-r.jp/katsudo/childsoldier081205_f.html

テラ・ルネッサンス HP からジャンプされる方はこちらが目印です →

問い合わせ funkist.081205@gmail.com(NPO 法人テラ・ルネッサンスイベント担当)

主催:NPO 法人テラ・ルネッサンス 協賛:LAB.TRIBE 後援:FM 京都、Spinns、momokuteki cafe



One World Festival

～感じる・ふれあう・助け合う

世界につながる国際協力のお祭り～



関西の NGO が大集合する、関西で一番大きいイベント。それが毎年恒例となっている、ワン・ワールド・フェスティバルです。今年は 12 月 20 日(土)・21 日(日)に大阪国際交流センターで開催されます。

テラ・ルネッサンスは活動紹介ブースと、民族料理店においては、前回も大好評だったカンボジアの民族料理「クイティウ」(お米のヌードル)と「ノムパンチェン」(揚げパン)、そしてウガンダ産コーヒーを販売します。寒さに負けず、スタッフとボランティア力を合わせて頑張ります！年末のお忙しい時期ですが、ぜひお問い合わせの上ご来場ください。

ワン・ワールド・フェスティバル

日時: 2008 年 12 月 20 日(土)10 時-17 時 21 日(日)10-16 時

会場: 大阪国際交流センター(地下鉄:谷町九丁目駅 近鉄:上本町駅)

ホームページ: <http://www.interpeople.or.jp/owf/>

【編集後記】(事務局:樋口裕城)

結晶母のデザインをリニューアルしました。先月からインターンを始めたひぐちも編集作業をお手伝いさせていただいたのですが、思った以上に編集には時間がかかり、レイアウトを考えるのも一苦勞でした。新しいデザインに加え、結晶母、テラ・ルネの活動全般についても皆様からのご意見・ご要望をお待ちしております。

また、現在、ラオス事業とウガンダ事業への資金が不足しています。引き続き皆様からのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

【編集・発行】

特定非営利活動法人 テラ・ルネッサンス

612-0031 京都市伏見区深草池ノ内町 5-23-105

Tel/Fax : 075-645-1802

E-Mail : contact@terra-r.jp

URL <http://www.terra-r.jp>

